

平成 30 年 1 月 25 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780122

氏名

生熊 源一

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 モスクワ (国名 ロシア連邦)
2. 研究課題名 (和文) : モスクワ・コンセプチュアリズムにおける人類学的身振り
3. 派遣期間：平成 29 年 9 月 1 日 ~ 平成 29 年 12 月 28 日 (119 日間)
4. 受入機関名・部局名： ロモノーソフ記念国立モスクワ大学、文献学部ディスコース・コミュニケーション学科
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先のモスクワでは、モスクワ大学における毎週の受入研究者の授業の聴講・研究相談に加え、モスクワ各地で行われている展覧会の観覧、図書館や書店などでの資料収集、アーティストへの聞き取り調査などを行った。

受入研究者とは専門が完全に一致するわけではないが、彼の講義は表象文化一般にまたがるものであり、広範な意味において今後の研究に役立つものであった。加えて、彼自身がこの研究課題の研究対象であるモスクワ・コンセプチュアリズムと呼ばれる運動の担い手(コンセプチュアリスト)であったため、コンセプチュアリストたちがどのような文化的知識のもとに自分たちの活動を進めてきたのかという問題に対する示唆ともなった。

アーティストとの面会に関して言えば、以前から訪問していたコンセプチュアリストのアンドレイ・モナストゥイルスキイだけではなく、千葉大学の鴻野准教授の手引きを得て、モナストゥイルスキイとは異なる方向性を切り開いてきたコンセプチュアリスト、ユーリー・アリベルトとの知己を得たことが収穫と言える。詳しくは後述するが、若手アーティストたちとも知り合うことが出来、今後の研究のための地盤になったと思われる。

展示に関しては——内容の良し悪しはともかく——2年に1度開かれる重要な美術イベントであるモスクワ・ビエンナーレや、コンセプチュアリストたちのコレクション展などを訪れることで知見を深めることが出来た。資料面でも、本滞在の目標であった博士論文の準備としては十分な成果をあげることが出来た。今後はこれらの資料や経験をもとに、博士論文を執筆していきたい。

(6, 7, 21 行ずつ)

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本資金による滞在の成果発表の見通しは、以下のようになっている。

まず挙げられるのは、滞在中に執筆した研究論文の投稿である。国内の学術雑誌のほか、受入研究者であるロマシコ准教授から（いまだ構想段階ではあるが）論文集へのお誘いを受けており、それが実現すれば国際的な成果発表として大きな意味を持つと思われる。

論文などの学術的な研究成果ではないが、その他の媒体での研究対象に関連する文章を発表することもある。この路線では、すでにロシア語で二つのテキストを執筆している。ひとつは研究対象であるグループ「集団行為」の公式サイトにおける彼らの活動への参加記であり、もうひとつは若手アーティストであるイワン・ノヴィコフの展示に関係する出版物へ掲載予定の展評である。これらは学術的著作物ではないが、日本においてロシア美術を研究してきた自身の研究者としての立場が現地の美術界への刺激になりうるという意味で、実践と研究を結び付ける成果物であると言える。

現在準備中の 20 世紀ロシア美術史についての書籍の翻訳も、受入研究者に教えを乞うた箇所があるため、今回の滞在の成果の一部として考えることも出来る。滞在中に自身の担当箇所の翻訳自体はほぼ完成しており、現在は出版へ向けて編集段階にある。

本研究課題はコンセプチュアリズムを主たる研究対象としているが、上記のようにコンセプチュアリズム以外のロシア美術も射程のうちにある。従って今後の研究の方向性としては、コンセプチュアリズム以降の若手・中堅アーティストたちの動向も扱っていききたい。今回の滞在で知り合ったヤン・ギンズブルグという若手アーティストは、「今はポスト・コンセプチュアリズムではなくネオ・コンセプチュアリズムの時代だ」と語っていた。すなわち彼によれば、コンセプチュアリズムは今現在もアクチュアルな問題を提起し続けているのである。ギンズブルグのこの発言の背景には、彼が「集団行為」のアクションに参加するなど、コンセプチュアリズムたちとの繋がりがあことは間違いない。こうした後進たちとコンセプチュアリズムの関係を、博士論文の一部で論じていきたい。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで得られたのは、まずもって機会である。ここで機会という言葉によって念頭に置かれているのは、大学における学術的な機会のことだけではない。本研究課題の研究対象であるロシア現代美術を研究するにあたって、とりわけ上で述べたコンセプチュアリズム以後のごく最近の文化事象を視野に入れる場合、現地に滞在することがどうしても必要になってくる。たとえば滞在期間中に触れることができたものとして、近年頭角を現してきたダゲスタン出身の女性アーティストであるタウス・マハチェワの回顧展や、ヴィンザボードと呼ばれる現代アートのプラットフォームの 10 周年を記念した若手アーティストの特別展示などが挙げられる。

本研究課題の中心であるコンセプチュアリズムに関しても、同じことが言える。これまで中心的に研究してきたグループ「集団行為」は、半年に 1 回程度の間隔でアクションと呼ばれる野外パフォーマンスを行っている。実施日は数日前になってようやく伝えられるため、本プログラムのようなある程度の期間滞在していなければ、なかなか参加することは難しい。このアクションに参加できたことも、本プログラムによって得られた成果である。

滞在中、モスクワを訪れた日本人研究者や、同じく滞在中の大学院生などと交流することもあった。人文学の研究が基本的には個人で行われるものだとしても、共同研究や情報交換などのため、周囲とのネットワークは必要不可欠である。こうした人的交流の経験も、今後の研究環境へと生きるものであると思われる。